落葉する季節 ― リライト版 ゴーストハント 完結記念小説―

三条瑠璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落葉する季節　―　リライト版　ゴーストハント　完結記念小説―

【Ｎコード】

Ｎ６９１８Ｚ

【作者名】

三条瑠璃

【あらすじ】

リライト版　ゴーズトハント第7巻から2ヵ月後のお話。

谷山麻衣、恋の予感！？

（前書き）

小野不由美主上　の、リライト版　ゴーストハントシリーズ完結を記念して、勝手に書いたものです。

ホラー要素は０％です。
麻衣が乙女チックです。
登場人物にオリジナルキャラクターがいます。名前の読みはお好きにどうぞ。
その他は、麻衣とぼーさんとタカと森さんしか出てきません。

ちなみに、８年前にうっかりホワイトハート版をなくしてしまい、あれがいつの時期を書いたものなのか、所長代理の扱いがどうなってたっけ。など、色々忘れているので、これはあくまでもリライト版終了後のお話です。その為、時期が被ってたり辻褄が合ってなくてもご容赦願います。

＜1＞

1

東京、渋谷、道玄坂。

ここにあたしがバイトするオフィスはある。

渋谷サイキックリサーチ、日本語で言えば渋谷心霊現象調査事務所。正式名称ＳＰＲ。

つい二か月前までは、大層見目麗しく、大層性格の悪い所長がいたが、現在彼はイギリスに帰国している。

今年の夏は本当に色んなことがあったし、切ない想いもした。しばらく経った今だからこそ、急転直下の夏の出来事を思い出すことが出来る。そんなことを考えながら渋谷駅ハチ公口から出て、時計を見る。ゆっくり歩いても、バイトの出勤時間までには余裕がある。

でも、なんだろう。早くオフィスにたどり着きたくなったあたしは、オフィスに向かう緩やかな坂道を進むうち、自然と駆け足になった。

「おはよーございますっ」

カランと音をさせてオフィスの扉を開けると、中から「やっほー」と返事がある。同僚のタカだ。

「早いね。あたしの方が先だと思った」

自分の席に荷物を置きながらタカをみると、腕まくりをして掃除をしている最中だ。壁の予定表を見ると、所長代理は【外出】となっている。

「うちの学校、今週末が文化祭だからさ。短縮授業よ」

「いいなぁ。でも、バイト入れてていいの？　準備は？」

一応調査員の肩書をもらっているあたしは、自分がいない間の依

頼者や案件を確認する為、日報を手に取る。
「喫茶だからね。私は当日までにお菓子作ればいいから、学校に残らなくていいのさ」
秋はどこの学生にとっても文化祭シーズン真っ盛りだ。かくいうあたしの学校も、二週間後に控えた文化祭の準備で学校中が浮足立っている。あたしは勤労学生を理由に、文化祭当日の店番が約束ではあるが、準備免除をもぎ取った。
「タカ、ちゃんと食べられるお菓子作れるの？」
「なにおうっ。クッキーのひとつやふたつ作れるわ！」
そんなやり取りをしながら、特記事項のない日報を読み終える。所長代理になってからは調査を断ることは少なくなったとはいえ、もともと依頼自体多いわけでもないし、いつものことだ。
「そうだ麻衣。うちの学校女子高だから、一応招待チケットがないと入れないんだけど、いる？」
拭き掃除まで終わらせたタカは、バインダー整理をする為あたしの向かいにある自席に戻ってきながら聞いてくる。
「って、何読んでるの」
目聡く、まさに今から読もうと手にしている手紙を指摘してくる。
「学校出るときに、下駄箱に入ってた。その場で読む訳にもいかないし、持ってきたの」
ビリリと封を破きながら答えると、
「ちょ、あんた何でそんな冷静なの。ラブレターでしょ、縁のない子でしょ」
失礼なことをのたまいながら、あたしの後ろに回ってくる。
「って、なに普通に一緒に読もうとしてんのよ」
そう言いながらも、隠す必要はないのでそのまま読み始める。
「え、いいの？」
自分で覗き込んでおきながら、隠す様子のないあたしに驚いてタカは慌てて体を離す。
「たまにあるんだ。こういうバイトしてるでしょ、だから」

「相談？　依頼？」
「元々あたしの学校にナルたちが調査に来てたでしょ。　それで、あたしがＳＰＲでバイトしてるのも結構有名でさ。自分の気のせいかもしれないけど、心配って子にとっては、話しを聞いてもらうだけでもいいみたいで」
「へー。知らないところで調査員の仕事してたんだねぇ」
いい子いい子とタカがあたしの頭を撫でる。
「この頃は少ないよ、容赦ない所長のおかげで。上に話を通すか、報告書にして記録だけ残しておくかの判断も出来るようになったし」
「そうかー。でもさ、何通もそういうことがあったからだとしても、本物のラブレターがないって分かるのもさみしいのう」
もう一度頭を撫でながら言うタカは、明らかにバカにしてる。
「うっさい。あたしにはちゃんと覚えておきたい人がいるんだから、放っておいて……って……？」
話しながらも手紙を読んでいたあたしは、明らかに今までの手紙の内容とは違うことに気付き、顔が赤くなっていることを感じた。そして極めつけは、手紙の締めに『ぜひ来てください、待ってます。』の文字。併せて今週末にある有名進学男子校の文化祭の招待券が1枚、同封されていた。
「！」
あたしが急に立ち上がったせいで、コロ付きの椅子が勢いよく後ろに滑り思いっきりタカにぶつかったが、タカはキャーキャーと叫んで大興奮のため一向に気にしていない。見間違いかともう一度手の中の見るが、自分宛で間違っていない。
てことは……てことで。
「え？え？えええぇぇーっ！」

2

「おーい、何の騒ぎだぁ？」
二人でワタワタしていると、派手な格好した男が扉を開けて入

ってくる。
「ノリオ！　いらっしゃい。あのね、麻衣がね」
タカは、扉から入ってきた男にタタタッと駆け寄る。
ちょ、何を言い出すかこの子は。
「こら、タカ！　余計なことは言うんでないっ」
慌ててあたしが止めに入ると、「へいへい」と態度は悪いがそれ以上何も言わず、お茶の用意をしに部屋の奥へ向かう。
「あらあら、にぎやかね」
すたじおみゅーじしゃんのノリオ、こと滝川法生。高野山の元僧侶で通称ぼーさんの後ろから、ひょいと顔を出したのは所長代理の森まどかさん。
「森さん、お帰りなさい。ぼーさん、どうしたの？」
普段はない組み合わせに、あたしは素直に質問する。
「俺の仕事先にわざわざ来てくれたからさ、お茶してたの」
「ええ、滝川さんをお茶に誘って、連れて来たの」
ニッコリ、まどかさんは笑って所長室に入って行く。ぼーさんもそれについて行く。
えーっと、どういうことだ？
さっきまでのことはすっかり忘れ、何やら意味ありげな二人が気になって、扉が閉まった所長室をジッと見てしまう。ぼーさんのおっかけのタカはどう思っているのだろう。そう思ってお茶の用意をしているタカを見ると、案外普通だ。
「タカ、大丈夫？」
自分でもよく分からない声の掛け方をする。
「何が」
そういって、タカはさっさと所長室の扉をノックし、お茶とアイスコーヒーを持って消えた。

3

「ギャランティ」
お茶出しから戻ってきたタカが発した言葉。
「ギャランティ」
オウム返しにあたしも呟く。
「前に調査した案件、協力依頼がいるのがあるって言ってたよね」
タカの言葉に、協力が必要な案件があったことを思い出して頷く。
現在のＳＰＲ日本分室は、実際に調査に向かうのは二名。しかも、所長代理がフィールドワーク研究室チーフの森さんだとしても、調査員がミソッカス能力者のあたしでは出来ることは限られてる。原則、現象を調べることがフィールドワークの仕事だが、調査をさせてもらうお礼に不都合を解決する場合もある。そのために協力者に応援を要請することもあるのだ。
「外ではお金の話は出来ないから連れて来たんじゃない？　いつものことだよね」
さすが事務員としてホスピタリティを発揮しているタカは、今までのこともよく見ている。
「いやー。今までって一人に協力要請しても、結局メンバー全員集まることばっかりだったし」
うにゃむにゃ。
「まあねえ。所長が依頼を受ける時って、どうしても大きな案件だけだったものね」
そう言って、タカもあたしの言葉にうんうんと頷いている。
みんなかぁ。どうしてるかな、ぼーさんには今日会えたけど。ナル、リンさん、真砂子、綾子、ジョン、安原さん。
なーんて、タカと二人しばらくボーっとしていると「仕事してない奴がいますよ」と、森さんに告げ口しながら所長室からぼーさんが出てきた。
急いで居住まいを正し、机の上に放りっぱなしだった手紙を片付ける。
「あれ、ノリオ早いね」

言いながらタカがぼーさんを応接セットに案内する。
「おう、確認だけだからな」
ぼーさんも勝手知ったる動きでソファーに座り、「もう十月だってのに涼しくならねーな。もう一杯アイスコーヒーちょうだい」と注文までする始末。ああ今、ナルの「ここは喫茶店じゃないんだが？」の声が聞こえたわ。
「で、麻衣がどうしたって？」
ぼーさんは、二杯目のアイスコーヒーを美味しそうに飲みながら話を振ってくる。
ぎくん。
「あー、騒がしくしてごめんね。ぼーさんには関係ない話だから」
ここは冷やかされないように無視だ。
「おいおい、なんか冷たいぞー」
「文化祭のことだもん、おじさんには関係ないもん」
「おじさん……いいけどさ」
いじけた振りをするぼーさん。ちょっと可哀相な気もするが、冷やかされるのが目に見えているので情にほだされてはいけない。タカも黙ってくれている。
が、
「シフトのことが関係しているなら、私には教えてくれるかしら？」
森さんが急に話に参加してきた。
基本的に空いている日は出勤。というスタイルは所長時代から変わらないが、森さんが所長代理をするようになってからは、もう少しきちんとしたシフト希望の提出と出勤表が組まれている。
「高橋さんは、今週土日が文化祭で休みよね。谷山さんは再来週」
「はい。それに変わりはないんですが、麻衣は今週日曜日も予定が入ったみたいで」
「あら、そうなの？　谷山さん」
予定表を見ながら話していた森さんは、クルリとあたしの方を見る。

「いえ、全く予定なんてないです！」
日曜日は、件の文化祭一般公開日だ。タカめ、黙っててくれるんじゃないんかい。勝手に話を進めるんじゃないとぎろりとタカを睨むが、本人はいたって涼しい顔だ。
「文化祭の準備とかだったら、そっちを優先してね。生活の為のお給料も大切だけど、高校生生活は今しか出来ないんだから」
「準備はあたし、免除されてるから」
気遣ってくれる森さんには悪いが、慌てて否定する。しかしそれで納得した訳ではないようで、ふうん？　とあたしの顔を覗き込んでくる。
「それじゃ、高橋さんの文化祭に行くの？」
「タカの文化祭は土曜日です」
「ほかの学校のお友達にも誘われたの？」
「いや、あっちは行くなんて決めてないし。一人だし」
ううう、諦めてくれない。有無を言わせない森さんのペースに、尻すぼみになりながら答えていると、
「なんだぁ、麻衣にもついに彼氏が出来たか」
とニヤニヤ顔でぼーさんが茶々を入れる。
「あら、それなら尚更お休みしていいのよ」
同じくウフフと笑う森さんに、「ですよねー、滅多にないことですもんねー」とタカも同意している。
あーあーもう。
確かに、日曜日に件の学校には行くつもりでしたよ。何せ、『知り合いに頼んであなたにこの手紙を渡します。』とあるように、手紙に差出人の連絡先は入っておらず、文化祭は一緒に回れませんと断るにしても、当日に学校で伝えなければならなかったからだ。だけど、バイト前にちょこっと寄るだけと思っていたのに。
そうこうしている間にも、明らかに人のネタで楽しんでいる三人に、本人の希望はきれいに無視され、あたしの週末の予定は決定してしまった。

＜2＞

1

制服で行くか私服で行くかを散々迷って、家を出たのは約束にギリギリ間に合う時間だった。

駅から徒歩十五分のその学校は名門の冠にふさわしく、創立からずっと同じ地に建っているという話の通り、歴史を思わせる閑静な住宅街の奥に建っていた。同じように文化祭に向かう一般客がいたので道には迷わなかったが、小走りで来たので息が弾む。

待ち合わせに指定された正門が見えたところで、息を整える為にちょっと立ち止まる。

ついでに鏡を取り出して、前髪をちょいちょいと整える。可愛く見せたいわけではないが、招待してくれたということは、少なくてもあたしに対して悪い印象は持ってないわけで。折角良い印象を持ってもらってるのに悪くする必要はないしね。

誰に言い訳するでもなくそう呟いて、よしっ！　と気合を入れると、待ち合わせ場所に向かった。

2

「谷山麻衣さん」

不意にフルネームを呼ばれて、ビクリと体が跳ねる。

「驚かせてごめん。はじめまして、丸山勇人です。」

声の主に振り返ると、やさしい印象の先輩。――襟に「？-２」とあるから、三年生で間違いないと思う。

「はじめまして、谷山です。あの……」

「来てくれてありがとう。ダメモトだったから、嬉しいよ」

そう言って微笑んで話す丸山先輩の姿が、誰かの姿に被る。
「手紙にも書いたけど、友人の学校行事の写真に谷山さんも写ってたことがあって。それを見てから、ぜひ直接本人と話がしたいなって思ってたんだ」
「それはどうもありがとうございます。で、あの……」
ああ、こんなシチュエーションに慣れてない自分が恨めしい。自分が何を言いたいのかも分からなくなってきた。あたしの話の続きを待ってくれているのか、丸山先輩は黙っているので余計に顔も見れなくなって、自然と俯いてしまう。
グルグルしてきたところで、近くからざわめきが聞こえた。顔を上げると、目の前の丸山先輩を見て驚いた顔をする何人かの男子生徒の姿がある。どうしたのかと見ていると、不意に手を引っ張られた。突然のことに抵抗する間もなく、先輩に引っ張られる形で校内に向かって歩き始める。
しばらく歩くと中庭に差し掛かり、人も少しまばらになった所でようやく先輩の歩調がゆっくりになる。あたしは掴まれていた手をそっと外す。
「どうしたんですか、さっき」
あたしの問いに振り返った先輩は、少し寂しそうな顔をしてごめんと言う。
「俺、三年なんだけど卒業出来ないんだわ。しばらく入院もしてたから、この学校くること自体久しぶりで。だから、さっき知り合いに見られて恥ずかしかったんだ。急に引っ張ってごめん」
そう言って、近くのベンチに腰掛ける。あたしだけ立っているのも変なので、少し距離をとって座る。
もう体は大丈夫なんですかと聞こうとして、出席日数が足りなくなるくらい長い間入院しているのであれば迂闊に聞けない気もして、結局黙ってしまう。
「まあ、体は良くなったからこうやって文化祭も参加してるしさ。今年受験しなくていいから、恋愛事にもチャレンジ出来るし。考え

様によっては悪くないんだよね」
　重い雰囲気を払うように、ね、と笑いながら話す先輩に、ここで文化祭を見ないで帰るとは言いづらく、「そうですね」と頷いてしまう。
「それじゃあ谷山さん、改めて、今日はよろしくお願いします」
　手を差し出されたので、思わず握手してしまう。
「谷山さん、今日は何時まで時間大丈夫？」
「丸山先輩は、当番無いんですか」
　このイベントが終わらない限り強制的にバイトも休みのため時間は決まってないが、本当ははすぐに断ってバイトに行く予定だったので答えづらく、質問で返す。
「俺、会計当番だから当日の仕事無いんだ。準備期間の金庫番と、文化祭後の収支報告するだけ」
　完璧な答えに逃げ道がなくなったあたしは、「そうですか」と呟く。
「それと谷山さん。俺、谷山さんの先輩じゃないから、勇人でいいよ」
「そうですか。では、丸山さん」
「勇人。俺、弟がいてさ」
「弟」
　単語を、反射的に繰り返してた。
「そ。それで、俺の周りで名字呼ぶ奴いないから、丸山なんて呼ばれると変な感じで嫌なんだよ」
　嫌と言われては頑なに名字で呼ぶことも出来ず、「わかりました」と頷く。
　嬉しそうに笑う勇人さんを見て、なんだか自分が悪いことをしているようにすら感じる。だってあたし、さっきからそうですかしか言ってないよ。普段はこんなにおとなしいキャラじゃないじゃん。ナルにだって噛み付くあたしだよ？　なのに。
　終始相手のペースなのに不思議と嫌な気がしないのは、ふと感じ

る誰かの姿を重ねているからかもしれない。

3

ガコンッ

シュートが外れたバスケットボールがリングに当たって大きな音を鳴らす。

「あー、外れた。くやしい！」

連続シュート成功で景品のグレードが上がるゲームで、最後の一投を外してしまったあたしは、ぶうっと膨れてしゃがみこむ。

「せっかく勇人さんが上手いこと繋いでくれたのに、くやしい」

まあまあ、と座り込んだあたしに手を差し出しながら勇人さんは笑う。

「いつまでも座っていたらみんなが見てるよ。それにほら、谷山さんスカートなんだから」

「！」

慌てて立ち上がり、恥ずかしくなってパタパタとスカートの裾を叩く。

しまった。調査だと絶対スカートなんて穿かないのに。

「でも、スカートよく似合ってるよ。写真では制服か学校ジャージだったから」

「……どうも」

言われ慣れていないから、なんて答えたらいいか分からず思わずつっけんどんな返事になる。しかしそれには気にした様子もなく、

「次はどこ行こうか」と聞いてくる。

「あ、ちょっとのどが渇いたんで何か飲み物買ってきます」

近くの模擬店を指さしてあたしが言うと、

「俺も何か飲みたいから買ってくるよ」

と申し出。

「さっきのごはんからゲームまで、ずっと勇人さんに出してもらっ

てるし」
さすがに奢られっぱなしは気がひける。
「でも、文化祭だから現金使えないし。金券に変えるのも正門前の受付まで行かないといけないから、ここからだと遠いよ」
「でも……」
「まあ奢られてよ。俺が誘ったんだし」
ね、と言われてはこれ以上押し問答するわけにもいかず、「ごちそうさまです」とぺこりとお礼する。

なんであたしなんかに興味持ったんだろうなぁ。
飲み物を買いに行った勇人先輩の後姿を見つめながら、ついため息が出る。そして、人混みの向こうで飲み物を買っている勇人先輩をなんとなしに見ていたあたしは、少しの違和感を感じた。
勇人先輩を見る周りの人の様子がたまに変なのだ。
驚きというか、ギクリと身を固くしている感じ。一緒に校舎内を回っている時から何となく感じることがあったが、一番長くいた先輩のクラスのでは感じなかったので気のせいかと思っていた。でも、今思い返すとそれ以外の3年生の階は顕著だった。
ほら、また。
注目して見ていると、顔を見てから反応しているのだとわかる。制服を着た一般生徒の中から、特定の誰か発見してしまって驚いている感じ。

4

「お待たせ」
しばらくして戻ってきた勇人さんは、紅茶とチュロスをあたしに渡しながらニカッと笑う。
「ダチん所からチュロス奪ってきた」
本当に仲の良い友達なんだとわかる、今までで一番楽しそうな話

し方。今までの少し抑えた雰囲気とは違っている。あたしたちはどこに向かうともなく歩きながら、チュロスにかぶりつく。
「おいしい！」
外はサクッと、中はふんわり甘い。
「男の人が作ってるんですよね」
「うん、しかもサッカー部の奴らね。千葉にあるネズミ王国で感銘を受けたＯＢが始めて、代々レシピが受け継がれているんだと」
「ぶっ」
代々のレシピのくだりに本気具合を感じ、つい吹き出す。
「はー。頭のいい人って、何でも卒なくこなすんだなあ。文武両道はあたしには無理だぁ」
これは、一日文化祭を回ってみての感想。模擬店にしても展示にしても、すごく凝ってる。しかも、学年が上がるほど力の入れようがすごい。進学校だから、３年生なんて受験を控えてギスギスしている人もいるだろうに。安原さんもそうだったが、本当に頭がいい人は余裕があるんだろうか。
そう思っての言葉だったが、
「そうでもないよ。大事なことは上手くいかない」
と、前を向いたままそっけない言葉だ。しまった、気を悪くしたかも。
チュロスを食べていたこともあり、しばらく黙って歩いていると、いつの間にか中庭に戻ってきていた。「ちょっと座ろうか」と勧められたので、今日最初に座ったベンチに腰掛ける。
「あの、さっきはごめんなさい」
ベンチに座ってからも勇人さんは黙ったままだったので、あたしから切り出す。
「ん？　なにが」
「頭のいい人は何でも出来るって、簡単に言ってしまって」
「いや、気にしないで。ホントにすごい奴もいるから。この学校はそういう奴が多いし」

そう言って、最初と変わらない印象で微笑む。
「あの、勇人さんの弟さんも高校生なんですか？」
話題を変えたくて、最初に話していたことを思い出す。
「高校生だよ」
「同じ学校？」
「いや、弟は違う高校。あいつは単なるサッカー馬鹿だから」
――単なる学者馬鹿だから。
不意に彼の言葉が被る。
あの時は、本人だと思っていた。だから何も言わなかった。続きを無理に聞き出そうともしなかった。
もう、会えないのに――……。

「谷山さん？」
黙ってしまったあたしに、勇人さんが心配そうに声を掛ける。
「あ、え。すみません、ちょっとぼーっとしちゃって」
慌てて謝る。
「疲れたかな」
勇人さんはやさしい。だからこそ、ちゃんと聞かなくちゃ。
「勇人さん、なんであたしを誘ってくれたんですか」
「写真で、気になって」
「それだけですか？」
体をずらして向き合うようにし、ちゃんと目を見る。
返事はない。
でも、待つ。
「谷山さんはさ」
言いにくそうに、でも、肯定して欲しそうな雰囲気で。
「谷山さんは、幽霊って信じる……？」
ああ、やっぱり。
やっぱりって気持ちと、ちょっとガッカリしている自分がいる。
たとえ想ってもらっても、受け止める気もないくせに。慣れない扱

いに舞い上がったり、目の前の人を見ずに彼を想ったり。いい加減な自分にもガッカリだ。
「ごめん、変なこと言った！」
黙っているあたしを否定と取ったのか、勇人さんはなかったことにするように少し大きめの声で早口に言う。
違う。そうじゃない。
あたしこそ、ちゃんと言わなきゃ。
「あたし、渋谷にある心霊調査事務所でバイトしてるんです」
「うん」
やっぱ知ってるんだ、あたしのバイトのこと。
「うちのボスは、情報なんて単なる電気信号だって言うんです」
「強引だなぁ」
ちょっと苦笑気味の声。
「いわゆる拝み屋とは違うらしくて。ゴーストハンターと言うそうです。既知の科学では説明できない『何か』があるから、科学にするためにその『何か』を調べる。ざっくり言えば、そういうことを仕事にしてます」
あたしもちょっと笑いつつ補足。
「でも、調査に行くと計測器に映らない現象とかに出くわす。科学では説明出来ないことが、体験的に積み重なる。でもそれは、あたしという人を介した情報であって、ただの気のせいかもしれないんです。」
真剣に聞いてくれる気配に、言葉を続ける。
「だから、あたしは幽霊を信じる信じないとかより、生きてる自分たちが亡くなった人達を無かったことにしないで、ちゃんと悲しいね、辛かったねって、そう思いたいだけなんです」
「そうだね」
ふっと息を吐き出しながら、勇人さんが頷く。
「それに、大切な人が幽霊になってまでいつまでも漂って欲しくないよ。やっぱり」

「そうだね」
「だから、会えない方がいいんだよ」
最後は、自分に向けての言葉だ。
「そうだね」と勇人さんは繰り返した。

しばらくの間、あたしたちは前を向いてただ座っていたが、何か区切りがついたのか、
「今日は本当に、ありがとう」
と勇人さんが立ち上がってそう言う。
「こちらこそ、色々奢ってもらってありがとうございました。楽しかったです」
あたしも立ち上がり、先輩を見上げる。彼とは――ジーンとは、背丈も顔も全然違う。何より生きて、あたしの前にいる。
「でも、人の気持ちを慌てさせるこういう呼び出しはもうやめて下さいね。」
最後にちょっと意地悪を言う。
「それは……」
ハッとした顔になる先輩。
しばらく考えて、
「そうだったな、ごめん。ちゃんと最初から言えば良かった」
そう言って頭を下げる。
「やだ、頭まで下げないでください。ちょっと意地悪しただけですから」
顔を上げた先輩は、やっぱり最後まで困った笑顔だ。チュロスを渡してくれた時の、ぱっと明るい笑顔はあたしの前では見せないつもりらしい。
「それじゃ、そろそろ文化祭も終わりだし、俺も仕事してくるよ」
「はい、あたしも帰ります」
正門まで送ってくれた先輩に手を振り、駅まで歩き出したあたしにかすかに聞こえてきた最後の声。

「……谷山さんが写ってる写真があるのは、本当なんだけどね」
え、と振り返った先に、もう勇人先輩の姿はなかった。

5

「つまんなーい！」
事の顛末を事実のみ簡潔に報告したところ、タカのぶーたれた声に一蹴される。

十月某日水曜日。
件の学園祭から三日後のオフィス。
文化祭準備は免除されているにあたしも、さすがに打合わせには捕まり月曜日はバイトに来れず、火曜日はタカが学校の用事でバイトに来れず、今日になった訳だ。おかげでいい感じに焦らされたタカはずいぶん妄想していたらしく、バイトに来たとたん質問攻めだった。

「はあ。そうそう周りに素敵なロマンスはないのねー」
意気消沈のタカは、クニャンと背を丸めてため息をつきながら、掃除用具を取り出している。
人のネタであれだけ遊んでおいて。と思わなくもないが、夏の一件であたしがかなり落ち込んでいたのを知っている友人は、ああ見えて心配してくれていたんだろう。お礼を言うと調子に乗るから、直接は言わないけれど。
所長がいない日常に少し慣れて、表面的には好きの気持ちが落ち着いてきていたところに、やっぱり切なくて、大切で、消えない想いが自分にはあるとハッキリした日曜日。そして最後に、ちょっとだけ気になる言葉が残った一件だった。
「だからさ、あたしは当分いいんだってば。そりゃさ、素敵な人があたしを想ってくれていたら、嬉しいけど」

タカは、掃除しながら聞いてくれている。
「でも今はさ、所長様が帰ってきた時にちょっとは使える奴になっておきたいから」
こうして大切な人を知ることも出来たのも、きっかけはどうあれ、間違いなくナルがあたしの生活を思ってバイトを持ちかけてくれたからだ。
「それにね」
ここは強調しないと。
「バカにせずやさしく教えてくれる上司がいるって、すごく仕事が楽しいのよ」
「あはははは！」
静かに聞いていたタカも、ついに吹き出す。
あたしも笑いながら、正体を知っても変わらずに今は留守の所長のことを言える、みんなのやさしさに感謝する。やっぱりこれも面と向かっては恥ずかしいから、言えない。

＜3＞

――谷山さんが写ってる写真があるのは、本当なんだけどね。
この気になる言葉の意味を知るには、自分からもう一度問わなければ機会はこないと思っていたが、それはあっさり実現した。

1

「あれ？　勇人さん？」
思わず声を掛けていた。
文化祭二日目午後。準備免除の代わりにずっとクラスの出し物の店番――自主映画のもぎりをやっていたあたしにようやく自由時間

を与えられ、ウキウキと校内を回っていた時だった。
ルーズに穿いたパンツに重ね着という私服姿で、髪の毛もツンツンにさせているが、見間違いはしない。むこうも驚いたようにこっちを見ているので、間違いない。
「谷山さん……」
バツの悪そうな顔をして、コンニチワと挨拶をする。
「今日は、友人さんに会いに来たんですか？」
あたしが写っている学校行事の写真を持っていて、あたしの下駄箱に手紙を入れられる人がいるとしたら、この学校の生徒だ。
「あ、うん。そうなんだ」
勇人さんは、歯切れの悪い返事をしながら、キョロキョロと辺りを見回す。なんだよ、ちょっと意地悪しただけじゃん。
思っていたところに、遠くからうちの制服を着た女子が走ってくる。
「勇輝いた！　見つけたー。って、あら」
目の前の男子――勇人さんに腕を絡めて、三年生の女子生徒があたしの存在に気付く。
「谷山さん！　今日も一日中店番じゃなかったの！？」
瞬間、あたしの名前を呼ばれるが、呼んだ彼女にあたしは見覚えがない。
「え、なんで名前」
「ごめんなさい！　下駄箱に手紙を入れたのは私なの！」
勢いよくお詫びの姿勢をとった彼女の迫力に負け、思わず下がる。
「どういうことですか。ええと、先輩」
名前が分からないので、学年関係で呼ぶ。
「はやし。林　尚子」
すぐに意図を察した彼女は名乗り、
「勝手なのは分かるんだけど、話を聞いてくれない？」
そう提案してきた。

2

静かに話しが出来るからと、一般客は立ち入り禁止区域になっている特別教室棟に移動したあたしたちは、物置と化した被服室に入る。

椅子を引っ張り出して3人が座るや否や、林先輩は口火を切る。

「今回のこと、あたしが勇輝に話を持ちかけたの」

「ええと、まず確認なんですが、勇輝さんというのは」

はい、と勇人さんが手を上げる。

「日曜日会ったのは、勇人に扮した俺」

「弟だって」

「うん、兄貴……勇人と俺は一卵性の双子だから。黙ってたら誰も見分けられなかった」

――無表情にしてれば、誰一人見分けられなかった。双子の兄なんだ。

頭の中で、夏のコテージで訊いたナルの声が甦る。

「まあ、最近は俺がサッカー始めてから筋肉がついて体格変わってきてたし、全体のイメージはだいぶ違ったかな。あいつ、病気で線がよけい細くなっちまってたから」

それでか。顔を見るまで勇人さんと体格が違うから別人だと思っているのに、まさか同じ顔があると思わないもんね。

「始めはちょっとした喧嘩だったの。バカバカしいくらいの、ちょっとした言い合い」

「俺のせいなんだ」

林先輩の言葉を継いで、勇輝さんが話す。

「俺と尚子、中学の時から付き合ってんだけど、兄貴も尚子のことが好きなんじゃないかって、俺が勝手に疑いはじめて。兄貴が入院してた時、よく尚子も見舞いに行ってたし」

「好きな人のお兄さんだもん、大事だから行くでしょ。しかも、勇輝と一緒に見舞ってたのよ」

怒ったように林先輩が勇輝さんに言う。
「私と勇人の間に恋愛感情がないのは明らかで。少なくても私には少しもなかったし、勇人も何度もあり得ないって言ってたんだけど、あの時の勇輝は意固地なくらい聞く耳持たなかった」
「うん。それで、兄貴が退院してしばらくたって、喧嘩になった。俺たち中学が一緒でさ、あの日もいつもと同じように三人でゲームしたりのんびりしてた。それで、写真が出てきた」
「写真？」
それまで黙っていたあたしも、気になる単語につい反応をしてしまう。
「私が写った、学校行事の写真。全員高校がバラバラになっちゃったから、何度か近況報告のつもりで私が写真を持って行ってたの」
「そこまではいつもの通りだったんだけど、その日に限って、兄貴がその写真を何枚か欲しいと言ってきて、尚子も応じた」
「勇人、ちょうど入院が続いて、学校行事に何も参加できていなかったからね」
「それで、俺がキレて外出して」
そこまで言って、勇輝さんの口が止まる。思い出しているのか、苦い顔だ。
「ムカついて駅前のコンビニで時間を潰してるうちに雨が降ってきて、兄貴と尚子が傘を持って迎えに来たんだ」
「正確には、傘を持ってない私を駅まで送って、拗ねてる弟を迎えにね」
「俺も外だったし、尚子はちゃんと送りたかったから、兄貴と一緒に駅で見送って。その帰り道、俺は兄貴にしてはいけないことをした」
そこで勇輝さんはまたしばらく黙り、ふーっと息を吐く。
「俺、やっぱりムカついて、嫉妬して。自分の傘と兄貴の傘を力任せに折って、雨の中兄貴を放って先に家に帰ったんだ。少ししてから兄貴も戻ってきたけど、体冷やしてて。病気のこと考えたら、体

を冷やしたり、風邪をひかすなんて、絶対させちゃいけなかったんだ」
そこまで聞いて、あたしは、お兄さん――勇人さんのことを話す二人の口調が、過去形になっていることに気付いた。
「兄貴はまたすぐに病院に逆戻り。結局、夏休みの間に灰になった。俺、幽霊でもなんでも兄貴にちゃんと謝って、本当はどうだったのか聞きたかったんだ。だけど、姿はもちろんないし、夢枕にも立ちやしない。だから俺、ずっと謝れなくて」
林先輩は、すでに目に涙を浮かべている。
「それでも毎日腹は空くし、学校もあるし、生活してたんだ。そしたら、なんとなく兄貴の気配を感じる日があって、兄貴の部屋に入ったらあの写真が置いてあった。実際は親が見つけたのかもしれないけど、写真を見てくれって兄貴に言われてるような気がしたから、ちゃんと見てみたんだ」
「それで、あたしに幽霊を信じるかって聞いたんですね」
うん、と勇輝さんは頷く。
「ちゃんと見たら、写真には尚子以外にも写ってる子がいた」
「谷山さん、私と何回か一緒に写ってるのよ」
林先輩の涙声に、エッとなって思わずまじまじと先輩の顔を見る。
「一年生学校案内と、体育祭」
確かに、四月すぐのオリエンテーリングは、一年生への学校案内と銘打ちながら、実態は学校の隅々まで清掃する日で、先輩後輩混ぜたチーム合同で行う。体育祭は縦割りチーム制で、クラス番号が同じであれば一緒のチームになる。写真も撮ったりする。
「私も、勇輝にもう一度全部の写真を見せてくれって言われるまで気付かなかったの」
「兄貴が持ってた以外にも、谷山さんが写っている写真が何枚かあったけど、全部横向きとか見切れててさ、ちゃんと顔が写ってるのは兄貴が持っていた分だけだった」
――言っておきたいことがあったんだけど。やっぱり、やめてお

く……
　ああ、緑陰の中で言われた彼の言葉が聞こえる。
「だから私、谷山さんに手紙を出したの。勇人がほとんど学校行事も出来ずに最後の高校生活を過ごしていたから、せめて文化祭くらいは、て思って」
「俺がサッカー部つながりの友達を頼って、兄貴の学校の先生に頼み込んで、兄貴のクラスの人に手伝ってもらって。当日に兄貴の振りして、谷山さんに会った」
　だから、事情を知らない勇人さんの顔を知る人が、体を竦ませるように固まっていたのか。勇人さんはもう、戻ることはないのに……。
「あんなことやっても、結局、兄貴の言いたいことは分かんなかった。谷山さんのことが好きだったのか、付き合いたいって思ってたのか、何にも分からない。」
　林先輩は、涙をこらえきれずに静かに泣いている。
「あたしも、分かりません。でも、ここまでちゃんと教えて下さって、ありがとうございます。だけど、勇人さんの気持ちは今はもう分からないけれど、何も言わないでいたのなら、言わないでおこうと思ってらしたんだと思います。だから、あたしもこれ以上知りたくないです」
　丁寧に預かった気持ちは、ちゃんとお返しする。今年の夏あたしが学んだ事。
「うん、それは今ではよく分かる。谷山さんにはつらい思いをさせてごめん。でも、あなたから貴重な話が聞けたから、俺と尚子は前に進めた。本当にありがとう」
　そう言ってお辞儀した後、泣き止まない林先輩の頭をポンポンと叩く勇輝さん。いいな、お互いを思いやってるこういう関係。
「それじゃ、あたし、そろそろ行きます。勇輝さんは、最後まで文化祭楽しんでいって下さいね」
　あたしは穏やかな気持ちを素直に言葉にして、被服室を後にした。

夏の終わりに確信した気持ち。大切に大切にしてきたからこそ、分かる。あの日の思いは今も何も変わっていない。

――　一人でも恋はできるから、もう泣かない。

Ｆｉｎ.

（後書き）

自分的読み方。
勇人（ユウト）→ユウジン→ユージン
勇輝（ユウキ）／兄弟ぽくなるように、文字重視
林　尚子（ハヤシナオコ）→リンショウコ→リンコウジョ

麻衣に追体験して欲しくて、出来たエピソード。
エピソードにキャラクターを当てはめるから、勝手なことをしてしまう可哀相なキャラクターになってしまった。すまんよ、若人たち。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6918z/

落葉する季節 ― リライト版 ゴーストハント 完結記念小説―

2011年12月23日05時50分発行